

## 東京都神社関係者大会講演要旨

## 神社界を襲う過疎化の危機

## 〈対策と実践〉

十月二十日に開催された令和四年度東京都神社関係者大会の第一部では「神社界を襲う過疎化の危機〈対策と実践〉」と題し、千葉県勝浦市の遠見岬神社・小林悠紀宮司と世田谷区の瀬田玉川神社・高橋知明禰宜の二名に講演いただいた（大会報告は十一月号）。このうち高橋禰宜の発表は、東京都神社庁過疎地域神社活性化推進委員会の施策報告でもあり、ここに要旨を掲載する。

世田谷区 瀬田玉川神社禰宜  
第二のふるさと創生協会事務局長  
神社庁過疎地域神社活性化推進委員

## 高橋知明

## なぜ都会で過疎なのか

本日は、世田谷区支部の「過疎地域神社活性化推進モデル地区」事業



瀬田玉川神社・高橋知明禰宜

の取り組みをはじめ、神社が持つアドバンテージ、すなわち神職は地元の名士である総代の皆さまとの友好的な繋がりがあること、また各々の神社には「鎮守の杜」を維持管理してきたという強味を活用できる、神社を中心とした地域活性化策についてお話ししたい。

一見、人口九十二万人の世田谷区がなぜ過疎化対策かという疑問もあるかもしれないが、神社に対する関係人口という点においては、どれくらいの人が神社に関わっているだろう

か。都会・地方問わず、神社に対する関係人口をどう増やすかということ、これはこれからの神社界にとって最大の課題の一つである。

キーワードは「交流」。これまで各々の地域で、各々の氏子を中心となりお守りしてきた神社だが、少子高齢化による人口の急激な減少、戦後の教育による伝統文化離れなどの影響から、これから先二十年で全国の約八万社ある神社のうち、約四割が立ち行かなくなるといふ。都内でも常に神社に携わっている人々の人口は希薄化しつつある。

すなわち、これからの神社を守っていくには、神職総代が中心となることはもちろんのこと、神社への新たなファンである氏子崇敬者の獲得が必須である。それが叶わないと神社が無くなり、大切な地域の伝統文化がその土地から永久に失われるということになる。

世田谷区支部では、過疎化対策として私が仲間と共に立ち上げた「一般社団法人第二のふるさと創生協会」と協力して、新たなファンである氏子崇敬者を獲得するための施策を始めた。その一つが、「全国神社スタンプリング」の開発で、先ずは世田

谷区支部四十九社での開発の検討を進めている。

このアプリ開発の最大の目的は、多くの日本人に自らの持つ思いやりや勤勉さが、世界基準に照らしてみると、とてもレベルの高い道徳性なのだ、と、気付きを持ってもらうということ。そして、その気付きのきっかけは、日本人のアイデンティティであり、神社にお参りに関わっていただくことだと考えている。

アプリの概要は、ユーザーが神社にお参りし、神社に設置されたQRコードと現在位置情報を照合することで、スタンプやポイントをもらえるというもの。この仕組みは神社に必ずお参りしないともえないものでもあ。また、神職が常駐していない神社でも、QRコードの設置さえしていたら、新たな参拝者の増加を期待できる。

具体的な内容は現在検討中だが、こうした新しいツールも参拝へのきっかけ作りとして活用し、神社に親しみを覚えて関わりを持ちたいという意識に繋がることを促したいと考えている。

このアプリは、先ずは世田谷区支部四十九社を対象に来年中のリリース



全国お祭り手伝い隊

スを目指し、東京版から全国版へと展開することを目標としていく。全国に拡大することで、全国の神社への新たなファンである崇敬者が生まれ、多くの交流が促進されて、結果的に多くの神社が守られることに繋がっていると考えている。

このアプリ開発に当たっては、第二のふるさと創生協会の関係者で資金と技術を出し合い進めている。当協会では「全国お祭り手伝い隊」という一般ボランティアを募集しており、現在約一六〇名の登録がある。このボランティア隊員を、全国の神社のお祭りのお手伝いに派遣している。都内でも台東区の浅草神社、世田谷区の経堂天祖神社などに隊員を派遣した他、全国でもいくつか活動を開始してい

る。コロナが落ち着けば、さらに活動を活性化させて、祭りをきっかけとした交流から、都会の人にとってはいつでも自分を迎え入れてくれる、第二のふるさとと呼べるような心の故郷ができることを期待したいし、地方にとっては神社を起点に関係人口の増加に繋がることを期待している。

### 鎮守の社をモデルとした森づくり

また、第二のふるさと創生協会ではもう一つの事業「鎮守の社をモデルとした森づくり」という植樹活動も展開している。

日本の国土の約七割を森林が占めるが、そのうち全くの自然林は1%もないと専門家はいう。戦前の日本の山々には、「奥山」と「里山」という区域が存在した。奥山は、手つかずの原生林で、多種多様な在来の動植物が生育し、水源を守り、山の保水力を高めるなどの機能があった。対して里山は、材木を育てたり、キノコを採ったり、炭を焼いたり、人間の生活に必要な最低限の恵みをいただき循環させる区域だった。

そして、我々神社関係者が意識したいことは、この奥山と里山の境界には、しばしば神社や祠が存在し、その先



第二のふるさと創生協会の植樹活動

には入るべからずという戒めがあったということ。奥山は神々の聖域であり、それを犯すとばちが当たって、自然のしっぺ返しがあるという、まさに森を守る先人の智慧があった。

ところが、全国が焼け野原となった戦後復興のため、拡大造林という国策で致し方なく奥山も里山化し、日本の山々は概ね単色林の林業のための山になった。その後、昭和四十年代から外材が輸入され、国産材は徐々に売れなくなり、昭和五十年代から一時隆盛を誇ったたくさんの材木店が倒産するに至った。現在の林業は、従事者が高齢化し、後継者不足に悩み、当協会へも多くの山主や森林組合関係者より、「もう息子が継がないから山を自然林に戻したい」など

という相談が絶えない。当協会では、自然林に約三十年で戻す技術はあるが、山は広大なためその資金はない。林野庁も、権益となる杉松檜など、針葉樹の植樹には補助金は出しても、自然林に戻すための広葉樹に補助金を出す制度はない。

現在の日本の山々は、自然林が失われ、野生の動物たちが食糧のため危険を冒して、里に下りて畑や人を襲う。山にどんぐりなどの栄養が少ないことも一因と考えられる。杉松檜も間伐されずに、それ以上育ちにくい状態が続く、日中でも暗い林間からは次世代へ遷移するための植物も生えず、生えても鹿などに食べられ、森は停滞し循環していない。さらには、その針葉樹から大量の花粉が



植樹活動に取り組むタレントのなすび氏



単色林の山は崩れやすい

発生し、花粉症という現代病が多くの人々を悩ませている。

毎年のように巨大台風が襲う時代になった。先の台風十四号でも、九州を中心に河川の氾濫などで大変な被害が発生したが、その度に神社も被災する。もちろん原因に気候変動の影響で降水量が増加したことも否めない。しかし、日本の山々の状態も、針葉樹の単色林が多く、根が浅く、保水力も低い。結果、山津波とも言える土砂崩れを起こし、下流の河川では堤防を越える洪水被害を発生させている。

当協会は、奥山を構成する「極相林」と呼ばれる森の最終形態を約三十年で作る技術を持つ。日本の気

候はとても温暖で、人間が活動を止めたとしても、日本中どこでも約三百年で極相林が出来る。と専門家は言う。

それを百年で実現したのが、この明治神宮の鎮守の杜。現在では科学が進み、三十年でこの杜を作ることができるのであれば、国民の命を守るために、神社界を挙げて奥山回復運動を推進していくべきではないだろうか。

「鎮守の杜」は、山を強くするだけではない。十一年前の東日本大震災の津波に耐えて残った杜があった。私の故郷・岩手県陸前高田市にあった高田松原と呼ばれる七万本の単色林の松林は、たった一本しか残らず、奇跡の一本松と呼ばれている。一方、平地にあっても、あの津波に耐えて残った杜があった。それが神社を囲む「鎮守の杜」だった。

関東大震災では、現在の墨田区の横網町公園に約四万人が避難したが、火災旋風により約三万八千人が犠牲となった。一方、そこから約二キロ離れた江東区の清澄庭園には、約二万人が避難し、犠牲者は無かった。この違いは、周囲を森で囲まれていたからだ。一本の大きな広葉樹は、一トンの水を蓄えるとも言われる。まさに、「鎮守の杜」は、水のカーテンでもあるのだ。



みちのく潮風トレイル名取トレイルセンター植樹活動

私は、この「鎮守の杜をモデルとした森づくり」は、当に神社界が先頭に立つて推進できる活動だと考えている。なぜならば、現在、その土地の在来種は、全国の神社の鎮守の杜にしか残っていないからだ。次の災害に備えるため、神社でどんぐり拾いをして、苗木に育て、山や街を守る場所に、適宜適所に植えていくというサイクルを国民運動として推進したならば、全国神社は多くの人々の交流拠点にもなり活性化する。

そして、森づくり活動の素晴らしいところは、人種・国籍・性別・思想信条

などに関わらず、誰でも参加出来る。ところ。海外では、パルプ生産や焼畑農業などで開発したアマゾンの回復、大規模な山火事であった山々の回復、砂漠の緑化などで、地球温暖化対策として、日本の技術を活かしたいところだ。

### 共生生のオアシスの夢

特に私が強く思うところは、世界三大宗教の聖地エルサレムで森づくり活動が出来たとすれば、一神教同士によって何千年と争いが絶えないこの世界において、眼の前で動植物が争うことなく共生しているオアシスのような森の姿を見た世界の人々の中から感性の変化が起こり、結果、争いが減り恒久平和が訪れることに繋がらないものかと考えている。

そしてその森とは、まさに「鎮守の杜をモデルとした森」であり、互いの多様な価値観を認め合い共生共生してきた日本人こそが、ひいては神社関係者こそが、森づくりで世界をリードして進めることができる活動だと考えている。

（一社第二のふるさと創生協会お問い合わせ先）  
URL: <https://d2urusato.com>  
メール: [info@d2urusato.com](mailto:info@d2urusato.com)  
電話: 〇三六四二六一四八六八

